

# 図書館たより

号数 第75号  
発行日 昭和62年1月20日  
編集発行 島根県立図書館  
松江市内中原町52  
TEL(0852)22-5725  
印刷 島根印刷株式会社

## 子供読書モデル町となって

### 掛合町教育委員会

掛合町では、昭和54年度から町内各保育所を中心に「親子読書」が普及し、幼児をもつ家庭では、その重要性についての認識が急速に高まってまいりました。

そこで、今年度に入って「子供読書モデル市町村」の指定を受けたのを機会に、読み聞かせで育った子供たちを対象として、グループ読書の育成と子供文庫の活用をねらいとした「子供読書会」の設立に力を入れてきました。

幸いにして、入間地区では小学校々区あげでの自治会の「えんがわ文庫」として盛大な発会式が行われたのを始め、掛合地区の金原、松笠地区の菅原と下組にそれぞれ小集落単位で「子供読書会」が発足し活動を続けています。

「金原子供読書会」のボランティア指導者の手によって毎月発行されている、「読書会だより」12月号

の中から活動の様子を紹介します。

「子供読書会も、8月には七夕まつり、10月には野外読書会と少人数ながら楽しい行事を行ってきました。文庫の本も小学校下級生にたくさんよろこんで読んでもらいました。12月～3月までの期間100冊借りてありますから冬休みを利用してたくさん読んでくださいね。

さて、12月の行事として次の2つを計画しました。

- ①つは、12月14日の県立図書館の「こどものつどい」に参加することです。
- ②つめは、12月21日にお母さん方にも参加していただいて「クリスマス会」を行うことです。  
……(以下略)」



こうした読書活動が今後いっそう家庭や地域に自主的な活動として定着するためには、良き指導者の発掘・養成が大切であり、今後とも県立図書館のご指導をいただきながら指導者の育成につとめたいと思っています。そして更に62年度には「図書センター」の指定も受けて、読書活動をいっそう盛んにしたいと願っています。

## 型破り図書館運営論

この夏、図書館に異変が起きた。その兆は今春4月から現われていたのがあったが、3月までは2万冊位で推移していた貸出冊数が、4月には2万冊の線を越え、あれよあれよと思う間もなく、6月には過去最高記録であった昭和59年11月のあのオープン時の2万7千冊を更新してしまった。そして、更に伸びつづけ8月には学校の休みも加わって、今まで経験したことのない4万7千冊の貸出を記録した。原因は漫画本を導入したのがヒットしたのだ。

実は、図書館に漫画本を、しかもコーナーまで作って入れることには大きな不安があった。活字文化の殿堂に漫画を入れるとはもってのほかのことだとする教育委員会、いや、もっと恐い市長のいかめしい顔が見えかくれするのだ。

開館して間もなく、密かに調査を始めた。しかし全国の市町村立図書館で、大量の漫画を導入している館がみつからず、ほとんど諦めかけていた矢さき、児童文学者の鳥越信先生にお会いする機会を得た。そして、先生から大阪府立児童文学館に漫画コーナーがあるのを聞き、早速研修に訪れ資料の提供を願った。

つまりは、水戸黄門流の「この印籠が目に入らぬか」との切札を得たのである。児童文学館でさえも漫画本を入れ効果をあげているのではないかと、まして我が市立図書館においておやである。万全の準備のもとに始めた導入は、ニュース等でご承知の通り大変なフィーバーを示した。

問題が大きくなると、市民からも多くの投書が寄せられた。そして、教育委員会をはじめ、市役所の庁議の席上にも格好の話題となり、「おれは知らん」と苦虫をかみつぶした様な市長の眉間の縦じわを想像して、身の縮む思いがした。

しかし、費は投げられたのである。これを続けるにしろ、不幸にして廃止の憂き目に合ったにしろ、結局は図書館を利用してくれる市民の一人ひとりが決めてくれることなのである。

## 出雲市立図書館長 奥井正之

今は、夏季のフィーバーは影をひそめ、3万5千冊台で安定した貸出をみているので、ひとまず安堵の胸をなでおろしているところである。

私は、地方行革はなやかなりし昨今、民間の施設はもとよりのこと、行政が作る施設にあっても、人を多く集めることができる施設でなければ、それは所詮税金の無駄使いだと批判されても、しかたのないことだと思うのである。一部の研究者と受験生のための書齋であつたり勉強部屋であつてはならないし、そんな図書館は、畢竟市民にそっぽを向かれ、利用されなく閑古鳥の鳴く図書館になってしまうのがおちである。

私は、図書館運営の基本を遊びにしている。極端な話、図書館で立読みを奨励したことがある。そのために雑誌コーナーを拡充し、2百種あまりの市販の週刊月刊誌を集めた。それには、「アンアン」「ノンノン」を始め、「フォーカス」から「ビッグコミック」等市販のほとんどの雑誌を集めることになったのだが、おかげですこぶる好評である。

図書館には、2千8百平方メートルの広い日本式庭園がある。この出雲の原風景を表現する枯山水式庭園も、今では客寄せの目玉のひとつになっている。

今年度の利用率はひとり当たり5冊程度の45万冊に達すると予想され、利用率において中国一になるようである。

それともうひとつ嬉しいニュースは、年度中途で待望のコンピューター導入が決定したことである。たぶんこの利用者の状態を自分の目で確かめた市長の英断であったと思われるが、すばらしい決定であった。

さて、62年度は、今も我が図書館が求め続けて認可されずにいる移動図書館車による、全市域の図書館のネットワーク化である。出雲市には、なるほど図書館はでっかいのがあるが、図書館網が無いよと笑われないように、最後の仕上げに全力を傾注しようと思っている。

# 子供と読書

渋谷 清 視

小学生を対象にした読書について話題を提起していきたくと思う。次の3つに分けて話したい。

## 1. 子供をめぐる現代状況

今年は子供の本世界大会が8月に東京で開かれ、子供の読書についてかなりの集会が開かれ、子供の本をめぐる研究書がたくさん出された。

例「子供の発達と読書の楽しさ」「どの本よもうかな? 1,900冊」「子育てに絵本を」「本・子ども・大人」

日本の現状は知識偏重で心を荒廃させてきた。ここで心育を考えていかななくてはならない。物の豊かさでは得られない精神的豊かさが必要である。又子供の自立が遅れている。自立とは自己確立である。母親の過保護、過干渉が自立をはばむ原因である。

## 2. 読書の役割—子供の本と読書のみつめ直し—

読書は自立を見守っていくのに大切な働きかけをするものである。子供達は常に疑問を持って追求し理解や認識を深めていくものである。だからそれに答えるよう対話をし、1冊の絵本を仲立ちとして親と子、保母と子がかかわり知的好奇心を盛りたてていくことが大切である。喃語が育つ時期に親がおいしいものを与える時、言葉かけをすることが大切である。心を豊かに育てるためにはことばの体験を豊かにすることが大事である。人間を生活に関する多様な価値観に対応させていくことが大切でそのためには本が必要である。

## 3. 大人はどうかかわるか

現在、子供は管理の対象になっている。子供の人權は愛情と良心に立って考えていかななくてはならない。児童文学作品には作者の児童観、発達観が反映されており、民主主義国家である外国のすぐれた作品を通して学んでいきたいものである。そして、子供の本を読みながら自分自身を発達させていくことが大切である。親は子供と同等の立場で考え、子供と共に育っていく共育でなくてはならない。今の世の中は真面目に真剣に取り組むことを軽視し、暗い現実のみを追う傾向がある。私達はこういう現実を直視し、希望を失わないで生活習慣の中に読書を位置づけたいと思う。

(S.61.11.7 開催)

# 公共図書館研修会まとめ

## 1. 子供の本の出版状況

1985年の子供の本の出版点数は、2,601点で史上最高であった。が、日本の子供の本の歴史は浅い。28年に岩波書店から「子供の本シリーズ」が出版された。35年に福音館から「世界傑作絵本シリーズ」が刊行され、その影響で他の出版社も競って翻訳絵本を出版し、今や日本の絵本出版界は世界の絵本博物館である。絵本も1冊1冊個性があり、大人をも教育する思想がもり込まれている。

## 2. 図書館での本の選定のしかた

図書館では良い本を複本で備えたい。現在、常時手に入る子供の本は1万冊位ある。その中でよい本といわれるのが3,000~4,000冊ある。この中から選び図書館員はぜひ読んでおきたい。1960年代に出版された「いやいやえん」「ながいながいペンギンの話」「だれも知らない小さな国」「龍の子太郎」などはぜひ読んでおきたい。又、外国のよい作品をひとまとめにして読んでおく必要がある。本を正しく理解するためには、とにかく自分で読み自分で感想を書くておくことが必要である。内容を読まないで、解説やあとがきだけを読んで本の良し悪しをきめてはいけない。

## 3. 子供読書会のポイント

子供読書会では司会をする大人がはじめに作品を必ず読み、内容を理解しておかなければいけない。読書会では結論を出さなくてもよい。子供が作る子供のための読書会であって、主役はあくまでも子供である。ほんとうは司会も子供がした方がよい。発表は自分の考えを自分の言葉で話し、子供のおしゃべりをひき出してやるのが大切である。本をもっと生活の中の一部として位置づける必要がある。大人は文字を教える前にもっと音読をすすめ、読むこと自体を楽しませ、ことばのリズムを楽しませたい。

## 4. ブックトークのしかた

ブックトークにより子供達に読書意欲をおこさせたい。ブックトークに定まった型はないが○書名、作者名から登場人物、内容を述べ結末はいわない。○書名、作者名から本文の一部分を紹介する。○作品の紹介、素直に自分の意見、感想をのべる。などが考えられる。

(S.61.11.7 松江開催) (S.61.11.8 浜田開催)

## 横田町読書会

奥出雲の中でも、最も奥に位置する、わが横田町コミュニティーセンターに図書室が開設されて、しばらくして生まれたのが「婦人読書会」です。なんとなくやさしいひびき、が嬉しくて仲間に入り8年になります。結成当時から自由な雰囲気メンバーだったせいもあり、感じたことなど遠慮なく話し合っています。

現在で読了した本の数は70冊余り、そのほとんどは文学作品と言われるもので、現代文学に属するものです。現代の作家によるものですから、一つの作品を読んでも、その作家の他の作品について、話題をひろげたり、作家による比較文学のような所までも話題を拡大でき、その後の読書作品選びへの足がかりを得たりすることなど、読書会あつての楽しみ方もできます。この会に参加していなかったら、これ程、さまざまな分野にわたつての本に触れることは決してできなかったと思います。

そして何より嬉しいことは、読書会を通して、人の「生き方」を学んだことです。文学の中に見る人間性は勿論、会に参加している仲間からも人それぞれの生き方を学びました。

## NEWS

### ★子どものつどい開く

12月14日、恒例の子どものつどいを午前と午後の2回にわたって県立図書館集會室で行った。

①、うた ②、干支うさぎの話、うさぎのでてくる本の紹介 ③、切絵OHP「花さき山」 ④、人形劇「あかずきんちゃん」のプログラムで行った。手づくり人形「あかずきんちゃん」は会場の子供達も一緒になって歌ったり、赤ずきんに応援したりしていた。子供読書のモデル町である掛合町頓原町美保関町などからもたくさんの参加があった。午前、午後合わせて500名近い人達が集り盛況であった。



会員の年齢は30代から70代という幅があります。そして各会員の生活体験もさまざまですから、読書を通して、「生きる」ということを、生きた教材で学んでこれたと思います。

私たち婦人は、妻として、母として、確かなものを得ようとして、悩みながら、苦しみながら、このめまぐるしい現代を生き続けています。そのただ中にいるからこそ、読書を通して体得したり、見聞したものが、生きる上のささえとなり、また、その生活の中に生かされてこそ、読書の醍醐味といえるのではないでしょう。

今、1月の読書会の「生きて行く私」上下巻（宇野千代著）を読み終え、感想をまとめてみようと思っています。この作品にも、1人の女性の生きざまを見て、考えさせられます。自分に偽りなく生きるということは、何と周囲に多くの犠牲を呼び難しいことか。でも、それだからこそ、「生きて行く」と言うことはすばらしいことに思えてくるのです。

新しい年を迎えるにふさわしい作品で、今年の読書会もスタートが切れそうです。

グループ名 婦人読書会  
会員数 13名  
代表者 植田 艶子

### ★図書館協議会開催

12月16日、むらくも会館において、協議会委員が集まり図書館協議会が開催された。昭和61年度事業の報告と62年度の予算要求の概要について説明があった。後コンピューター導入に関し、ネットワーク化についての質問があり、大学側から大学間でのネットワークもすぐには非常に困難との発言があった。最後に県下の読書普及の今後のあり方を協議した。

### ★お貸しします！人形劇を

県立図書館では毎年開催している「子どものつどい」で上演した人形劇を、録音テープと共に各市町村教委、団体等へお貸しします。59年度に上演した人形劇「三枚のお札」は各町村で教育委員会、ボランティアの人達によって数回上演され、好評でした。利用希望の方は県立図書館普及係、TEL 0852-22-5730まで申込み下さい。貸出し出来る人形劇「三枚のお札」「まんまるパン」「わんわん物語」「あかずきんちゃん」「ねずみのよめいり」